慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ポストコロニアルとポストモダン : 文化人類学と文化研究
Sub Title	
Author	阿久津, 昌三(Akutsu, Shozo)
Publisher	三田社会学会
Publication year	1998
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.3 (1998.) ,p.17- 23
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 I : 社会学におけるモダンとポスト・ モダン
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-19980000-0017

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ポストコロニアルとポストモダン
文化人類学と文化研究

阿久津　昌三

1．ポストコロニアルと〈他者〉

フランツ・ファノンは、『黒い皮膚、白い仮面』のなかで、白人と黒人の他者像（イマーゴ）の形成について、ラカンの「鏡像段階」の概念をもちいて、次のように語っている。

「ラカンが記述したこの過程を理解すれば、白人にとっての真の〈他者〉は黒人であるし、また黒人であり続けることはもはや疑い容れない。また、その逆も。ただ、白人の場合、〈他者〉は身体像の次元で、非我として、つまり、同一視できぬもの、同化できぬものとして絶対的に知覚される。黒人の場合は、前述の通り歴史的・経済的現実を考慮に入れる必要がある。……この（ラカンによる鏡像段階の）発見の重要性は容易に理解できるだろう。主体が鏡に映る自分の姿を認め、それに喜びを示す度に、喜悦の対象になるのはいつも、いわば〈主体固有の心的統一性〉である」（ファノン、1970:178）。

『黒い皮膚、白い仮面』という標題には、肌の色の両極を示す「黒」と「白」の色彩的な対比の軸と、身体生理の「真実」を象徴する皮膚と社会関係の「虚偽」を象徴する仮面との非対称的な対比の軸とが交差している（渡辺、1997:33）。1952年に刊行された『黒い皮膚、白い仮面』のなかには精神科医としてのファノンを、また、ファノンの死後1961年に刊行された『地に呪われたる者』のなかには革命家としてのファノンを発見することができる。これはポストコロニアルな状況とも密接に関わってくる。それは、白人と黒人に分割された植民地状況ではなく、その両者の間を彷徨する「患者」の精神分析であり、それは「植民地的状況の徴候（signs）とそれが原因となる病的な症状（symptoms）」（バーバ、1992:98）であり、白人を希求しながら、希求すればするほどパラノイアに陥っていく黒人の姿が描かれている。バーバはファノンの作品のなかに「同一性の内部に潜む他者性」を次のように読みとっている。

「「科学的」な事実が街での経験によって浸蝕されてくる。社会学的な観察が文学的な技巧によって中断され、解放の詩が、植民地社会の重苦しく、衰退を思わせる単調さに対抗すべく、不意に提出されるのだ」（バーバ、1992:98）。

だが、ファノンは「「科学的」な事実が街での経験によって浸蝕され」ながらも、アルジェリアのブリダ病院を辞任し、ＦＬＮ（民族解放戦線）で活動を開始しながらも、臨床に立ち、『地に呪われたる者』を叙述していくのである。ポストコロニアルな状況は「今なお植民地主義は暴虐なる亡霊としてうろついている」という認識をもつことが必要となるであろう（崎山、1995；冨山、1996）。

ところで、ファノンのテキストと同時代的にアメリカで出版されたクライド・クラックホーンの『人間のための鏡』（1949）と題した人類学の入門書のなかにも〈鏡像〉を発見することができる。

「未開人を研究すると、われわれ自身がよりよく理解できるようになる。通常はわれわれは、自分が特殊なレンズを通して人間の生活を見ていることに気づかない。丁度、魚が水の存在に気がつかないようなものである。同様に、自分の生活している社会の地平から抜け出したことのない研究者には、自分自身の思考を作り上げている習慣に気がつくことはとても望めない。人間を研究する者は、その対象ばかりでなく見る目についても知らねばならない。人類学は、人間に対してある大きな鏡をかかげて、人間自身に、その変幻きわまりない姿を見せようとするものである」（傍点原文）（クラックホーン、1971:26）。

ここには、異文化（other culture）を理解することは〈鏡〉（＝人類学）を媒介として自文化（our culture）を理解することであるという論理を読みとることができる。渡辺公三によれば、「鏡としての人類学」という比喩は、戦後の文脈のなかで形成された、人類学の「もっとも新しい現代的〈創設神話〉」の表現であり、戦後の人類学が「民族誌的〈私〉を形成するものとしての鏡像段階に達したという」ことで、「この楽天的な鏡像とファノンのある切迫感を帯びた鏡像の隔たりが、人類学そのものの楽天的な思考態度を象徴するものではないことを願わずにはいられない」と危惧している（渡辺、1997:60）。しかし、この楽天的な思考態度は、人類学だけの問題群ではないだろう。これは、社会学、経済学、政治学などの隣接諸学問にも共通する「鏡としての社会科学」という問題群がある。例えば、日本の社会学において、「色メガネ」（＝欧米諸国から輸入された明治期から最近までの社会学理論）をかけて、近代化（モダナイゼーション）という多次元的な概念を媒介として、〈他者〉及び〈自己〉を見てきたという問題群がある（富永、1991）。

また、〈他者の客観性〉とも呼ぶべき視点は、ルース・ベネディクトの『菊と刀』（1946）にもマーガレット・ミードの『サモアの思春期』（1928）にも発見することができる。ここでは紙幅の関係でベネディクトの引用にとどめる。

「日本について書く日本人は、本当に重要な事柄を、それが彼にとって、彼が呼吸する空気とおなじように慣れきった事柄であり、眼につかない事柄であるため、見のがしてしま（い）……国民〔日本人〕が自らの世界観を分析することに期待をかけるわけにはいかない」（ベネディクト、1967:12）。

このアメリカの著名な人類学者を引用したのは、「文化相対主義」が内包する問題群を提示するためである。文化相対主義とは「異なる文化をもつ人々は、異なる世界に住む、異なる概念体系をもつ、経験を異なる仕方で組織している」（浜本、1985:113）と定義されているが、その論理的な帰結は、「異文化理解は不可能である」ということになりかねない（太田、1998, 95-141）。逆に言えば、日本の社会科学が、欧米の学問の「色メガネ」をかけて、その覇権構造のなかで〈他者〉及び〈自己〉を見てきたという問題群が

あるだろう。これは日本における社会科学のアイデンティテイの危機でもある。

2．前近代／近代／後近代

酒井直樹は、前近代と近代という歴史・地政的対照関係が、地域研究（エリア・スタディーズ）のような学問分野で、言説（ディスクール）を組織するための重要な装置として機能してきたことを示唆している。

「ポストモダンあるいは後近代は、その用語がさし示すとおり、近代にとってひとつの他者なわけだが、そうしたポストモダンをわれわれ自身がとらわれている〈近代的〉言説の内部で同定することはできないのではないか……後近代と近代という区別あるいは対立を構成するものは何か、さらに、近代をひとつの全体として考えるうえでどうしても必要な〈近代ならざるもの〉、非近代、と近代との対立とは何なのかをあらかじめ問うてみることは、あながち無駄な作業とはいえないだろう。同時に、後近代だけでなく、近代に対立するもうひとつの非近代との対照で近代はこれまで規定されてきたのだから、ここであらためて近代対前近代という区別をも視野に入れる必要があるのではないだろうか」（酒井、1996:3-4）。

これらの言説装置を通じて、近代／前近代、西洋／非西洋という二項対立の構図が設定されたが、それは「西洋なる仮想された同一性」を定立するためであった。酒井は「西洋なる神話」を創造した社会学者のハーバーマスを次のように批判している。

「一方で西洋を眼に見えるものとする鏡としての非西洋が必要であると認めながらも、他方でそのようにして報告者によって提供された非西洋文化の鏡が実は多くの曇りをもったものであるかどうかはまったく問わないのである。彼のもとに届けられた鏡は、民俗学者や人類学者の異国趣味の産物にすぎないのかもしれないのだ。……ハーバーマスにとって、共約不可能性（incommensurability）はせいぜい文化相対主義という、それ自身がニセの問題を意味するにすぎないのである」（酒井、1996:7-8）。

ここには、「鏡としての人類学」という比喩との類縁関係を読みとることができると同時に、文化相対主義が最も忌み嫌うはずのエスノセントリック（自民族中心的）な発想が忍びこんでいるのである。明治期の進歩史観の導入に始まり、1930年代以降の京都学派の知識人たちの西洋／非西洋の関係性をめぐる議論を経て、戦後期のいわゆる「近代化論」及び「地域研究」という系譜には、〈鏡〉を媒介として、〈我々〉と〈他者〉という対比の軸と、〈近代〉〈前近代〉〈非近代〉という非対称的な対比との軸とが交差している。例えば、「近代化論」では、「近代化」とは「ヨーロッパ化」と同一視されていたものを、「アメリカ化」と同一視することと地政的に移行させることで、〈我々〉と〈他者〉の表象をめぐる位相を変化させてきたのである。また、「地域研究」は、第2次世界大戦後、アメリカの国際関係論のなかで、「エリア・スタディーズ」ということばで使われたものであるが、「日本研究」「アフリカ研究」「アジア研究」などのように、各国別、各地域

別の研究であって、〈他者〉（＝特定の民族、国、地域）についての「学際的」という名の総合的な理解を目的としたものであった。特に、「日本研究」にみられる言説装置については、最近になって、文化研究（カルチュラル・スタディーズ）の対談、鼎談等の形式による論文がある（成田・フジタニ・酒井、1995；ハルトゥーニアン・酒井、1997）。地域研究の在り方もまた脱中心化、脱本質化のなかで再検討されるべきであろう。

3．ジェンダーとエスニシティ

ポストコロニアルな知識人のひとりであるアリ・ラタンシは、植民地的言説におけるジェンダーとセクシュアリティについて、次のように記述している。

「非ヨーロッパの〈他者〉とその空間が、選択されて女性化され、ヨーロッパ人による侵入と領有、従属化を正当化する……この女性化によって、〈他者〉は隠喩的にも喚喩的にも女性的なものとして構築される。……これと対照的なのが、今度は〈他者〉の男を相応しい男性性が欠けた存在として描き出す言説である。……このような男らしさ、女らしさの構築は、「本国」においても植民地においても、性的な差異が文化的、政治的に再構築されるプロセスの一部であって、〈ウェスト〉と〈レスト〉とが編成されるさいの複雑な相関関係を示している」（ラタンシ、1996:41）。

ラタンシは帝国主義や植民地政策などの植民地的言説にみられる「セクシュアライゼーション」の現象を読みとっている。裸体／衣服、口承文化／書承文化、技術的な停滞／テクノロジーの進歩等などの二項対立は、「ジェンダー」と「セクシュアリティ」の政治化によって構築されてきた（和田、1995；中村、1997）。これは、非西洋社会という〈他者〉の文化を否定することで、未開あるいは野蛮とみなすことで〈自己〉を規定してきた、と同時に、西洋社会のなかに未開的なるもの、野蛮なるものとしての〈他者〉を見いだし、それらを周縁化することで〈自己〉の中心化をはかってきた。このイメージは、「探検記」「旅行記」「民族誌」等に掲載された絵画、版画、写真という虚構の〈鏡〉を媒介としてオーセンティックに視覚化されてきた（Edwards,1992；Kuklick,1991;Stocking,1987）。

ジェンダーと同様に、エスニシティ、人種主義（レイシズム）のなかにも未開／文明の世界観が浮き彫りになるだろう。その場合に問題となるのは「部族」という概念である。例えば、新聞報道（最もこれは社会科学における民族問題を扱った学術書にもみられるのだが……）では、ヨーロッパに関しては「民族紛争」とか「民族対立」と論述されるが、アフリカの民族紛争の事例となると、それが「部族抗争」とか「部族対立」と論述される。言い換えれば、暗黙のうちに、西洋社会では「民族対立」をもちいて、非西洋社会（特に、アフリカ社会）では「部族対立」をもちいて使い分けが採用されている。このコンテクストでは、アフリカを「未開」という西洋社会の視点から、アフリカの民族紛争をモダンではない遅れたものとして「部族対立」と記述されるのである（松田、1998:17-20）。ここにも植民地的言説を読みとることができる。また、このような発想は、構造＝機能主義

的な諸学問領域（人類学、社会学、比較政治学等）にも踏襲されてきた。ここには〈他者〉を見る「色メガネ」を愛用することで、境界のある確固とした「部族のまとまり」があると認識してきた植民地支配の虚構が見え隠れしており、その後の脱植民地化の状況のなかでも、〈他者〉を見る新しい「色メガネ」（＝システム理論）のなかにもいき続けることになった。

4．〈文化〉の脱中心化、脱本質化

姜尚中は、『オリエンタリズムの彼方へ－近代文化批判』のなかで、サイードのオリエンタリズム批判を受けて、次のような最も根源的な問題を提起している。

「〈他者〉とは何なのか、それはどのような言説や制度的実践の働きを通じてねつ造されるのか、また〈他者〉との関係依存性のなかでできあがるアイデンティティとは何なのか、ということだ。それは、具体的にはメトロポリタン的な文化と、周縁的で脱中心的な文化の表象とのかかわりを問うことなのだ」（姜、1996:4）。

文化人類学は、エリック・ホブズボウムとテレンス・レンジャーの編集による『創られた伝統』（1983）によって、伝統／近代という二項対立関係を揺るがす衝撃を受けた。それは、いかに伝統／伝統的なるものが近代の言説装置のなかで政治的な意図によって創られたものであるのかを暴露している（Hobsbawm and Ranger,1983）。さらに、その衝撃が最も強かったのは、1980年代後半から1990年代初期にかけて、『オリエンタリズム』以降隆盛してきた「ポストコロニアル理論」と呼ばれる「異文化理解のメタ理論」である。ポストコロニアル理論は、異文化理解を中心とする文化人類学を西欧の植民地主義とともに隆盛した学問であるとして批判することに主眼がおかれている。太田好信は、ポストコロニアル批判のなかで、「日本において文化人類学を学ぶ意義とは何か」を問いかけている。

「文化人類学は欧米を中心に、（多くの場合）英語を学術用語とする学問として制度化されていった。これは文化人類学のグローバル化に見えるかもしれない。だが、実際は学問が国家・言語・文化複合体内部で完結してしまった結果なのである。……欧米理論の盲目的な追従や模倣は、これまでも何度となく批判されてきた。しかし、それは、ある世界ともうひとつの世界を結びつけようとするグローバルなプロセスでもある。そして、そこでは翻訳がキーワードとして機能する。覇権を握る社会において制度化された学問がグローバルに広がるよりは、この翻訳をとおして世界が連結するヴィジョンに、私は賛同する。……文化人類学という学問は、欧米の文化人類学が世界規模で伝播するプロセスをグローバル化として誤認し、その結果、学問の均質化が進行するという「悲劇的（トラジックな）プロット」にもとづいた物語によって文化を語ろうとする」（太田、1996:286, 304-305）。

このような欧米を中心とする学問体系の覇権構造に対する問題提起は何も文化人類学だ

けではないだろう。これは日本における社会科学全般に通じることであろう。「トランスポジション」の射程から、いかに新しい学問の可能性を模索するかにかかっている。

文献

バーバ,H.K. 1992 「ファノンを想起すること－自己・審理・植民地的状況－」（田中聡志訳）『imago［イマーゴ］』3(7)、96-110頁。

ベネディクト,R. 1967 『菊と刀』（長谷川松治訳）社会思想社。

クラックホーン,C. 1971 『文化人類学の世界』（外山滋比古・金丸由雄訳）講談社。

Edwards,E.(ed.), 1992, *Anthropology & Photography 1860-1920*,Yale University Press.

ファノン,F. 1969 『地に呪われた者』（鈴木道彦・浦野衣子訳）みすず書房。

―――― 1970 『黒い皮膚・白い仮面』（海老坂武・加藤晴久訳）みすず書房。

浜本満 1985 「文化相対主義の代価」『理想』626、105-121頁。

ハルトゥーニアン,H.・酒井直樹 1997 「〈対談〉日本研究と文化研究」『思想』877、4-53頁.

Hobsbawm,E. and Ranger,T.(eds.), 1983, *The Invention of Tradition*,Cambridge University Press［前川啓治・梶原景昭他訳『創られた伝統』紀伊國屋書店、1992］。

姜 尚中 1996 『オリエンタリズムの彼方へ－近代文化批判－』岩波書店。

Kuklick,H., 1991, *The Savage Within:The Social History of British Anthropology,1885-1945* , Cambridge University Press.

松田素二 1998 「民族対立の社会理論－アフリカ的民族編成の可能性－」武内進一編『現代アフリカの紛争を理解するために』アジア経済研究所、15-39頁。

中村雄祐 1997 「文字という文化」『岩波講座文化人類学 第10巻 神話とメディア』岩波書店、149-181頁。

成田龍一、タカシ・フジタニ、酒井直樹 1995 「討議 アメリカの「日本」、アメリカからの声」『現代思想』23(9)、8-37頁。

太田好信 1996 「ポストコロニアル批判を越えるために」『岩波講座文化人類学 第12巻 思想化される周辺世界』岩波書店、283-307頁。

―――― 1998 『トランスポジションの思想』世界思想社。

ラタンシ,A. 1996 「人種差別主義とポストモダニズム（上・下）」（本橋哲也訳）『思想』868,31-54頁、870,110-140頁。

酒井直樹 1996 『死産される日本語・日本人－「日本」の歴史・地政的配置』新曜社。

サイード,E. 1986 『オリエンタリズム』（今沢紀子訳）平凡社。

崎山政毅 1995 「暴力の重ね書きを再読する－『地に呪われた者』のファノンのあらたな可能性に向けて－」『現代思想』23(6),104-119頁。

Stocking,G.W.Jr.,1987,*Victorian Anthroplogy* ,The Free Press.

富永健一 1991 「日本の近代化と欧米の社会学思想－日本の精神的近代化過程の一側面」『思想』808、4-38頁。

冨山一郎 1996 「対抗と遡行－フランツ・ファノンの叙述をめぐって」『思想』866、91-113頁。

渡辺公三 1997 「人種あるいは差異としての身体」『岩波講座文化人類学 第5巻 民族の生成と論理』岩波書店、31-66頁。

和田正平　1995　『裸体人類学』中央公論社。

（あくつ　しょうぞう　信州大学教育学部）